

少数者（マイノリティ）の視点から見た国際理解教育（3）

International Education from the Viewpoint of Minorities (3)

在日韓国朝鮮人の韓国留学

Study Abroad in Korea by the Korean, Born and Living in Japan

寺島隆吉 TERASIMA Takayosi

(岐阜大学教育学部, School of Education, Gifu University)

小池美也子 KOIKE Miyako

(シンガポール日本人学校, The Japanese School, Singapore)

1 はじめに	4-4 韓国留学決定
2 キム・ホスさんへのインタビュー	4-5 韓国留学へ
2-1 出会い	4-6 将来
2-2 キム・ホスさんの自分史 (誕生～大学)	4-7 考察
第1回インタビュー 2004年4月17日	5 洪順愛(ホン・スンエ)先生へのインタビュー
2-3 自分史(大学卒業～教師生活)	5-1 出会い
第2回インタビュー 2004年5月21日	5-2 ホン・スンエ先生の自分史
2-4 あこがれの韓国留学へ	第1回インタビュー 2004年11月10日
2-5 キムさんの夢, これからのテーマ	5-3 韓国留学
2-6 考察	5-4 現在
3 鄭亜美(チョン・アミ)さんへのインタビュー	5-5 第1回目インタビューの考察
3-1 出会い	5-6 ホン先生への疑問
3-2 鄭亜美さんの自分史(誕生～朝鮮中級学校)	第2回インタビュー 2004年12月22日
インタビュー 2004年5月24日	5-7 第2回目インタビューの考察
3-3 自分史(高等学校～大学)	5-8 ホン先生へのさらなる疑問
3-4 韓国留学へ	第3回インタビュー 2005年1月19日
3-5 考察	5-9 第3回目インタビューの考察
4 金友美(キム・ウミ)さんへのインタビュー	6 おわりに
4-1 出会い	
4-2 金友美さんの自分史(誕生～中学校)	NOTES
インタビュー 2004年6月8日	REFERENCES
4-3 自分史(高校～短大)	

1 はじめに

以下は私＝寺島隆吉が指導した学生（小池美也子）の卒業研究の一部である。

これは寺島隆吉・佐藤聡美・大津由衣子（2004a, b）「少数者（マイノリティ）の視点から見た国際理解教育：特に在日韓国朝鮮人の教育・生活・人権について（上, 下）」の続編をなすものである。寺島隆吉・河田素子（2003a, b）「国際理解教育と日系ブラジル人児童の教育（上, 下）」も考慮すれば、「少数者の視点から見た国際理解教育」をテーマとする研究の第3部にあたる。

彼女（小池）は2003年8月から1年間、韓国のソウル産業大学に交換留学生として滞在した。私は、その年の11月に国民大学（ソウル）でおこなわれた第4回・韓国「国際理解教育学会」に発表者として出席し、彼女と学会の会場で再会した。

留学先で多くの在日韓国朝鮮人と出会うことになった彼女は、韓国に多くの在日韓国朝鮮人が留学している事実を驚きの表情で語ってくれた。そこで私は、卒業研究として「留学している在日韓国朝鮮人に“なぜ韓国に留学しているのか”をインタビューしたらどうか」と彼女に提案した。

留学から帰国して彼女は卒業研究に取りかかった。卒業研究の全体は、序章「本研究の目的と方法」、第1章「在日韓国朝鮮人の歴史：戦前・戦中」、第2章「在日韓国朝鮮人の歴史：戦後・現在」、第3章「済州島事件から見る朝鮮半島と米国・日本の動き」、第4章「韓国留学する在日韓国朝鮮人：インタビューから見る思想と行動」、終章「在日韓国朝鮮人と日本の国際理解教育」の6章から構成されている。本論で発表するのは第4章「韓国留学する在日韓国朝鮮人：インタビューから見る思想と行動」である。

なお在日韓国朝鮮人の歴史は、第2次世界大戦時に強制収容所に隔離され、戦後も悲惨な人生を送らざるを得なかった日系アメリカ人の人生と酷似している。これは同時に9・11事件以後に在米アラブ人が日々遭遇している運命とも酷似している。したがって、在日韓国朝鮮人の思想と行動をたどることは、韓国人にとっても日本人にとっても国際理解教育を考える上で貴重な資料を与えられるものと信じている。

さらに以下では、しばしば「在日コリアン」という言葉が使われているが、これは「在日韓国人」と「在日朝鮮人」との総称である。日本では「在日韓国人」と「在日朝鮮人」が政府によって違った取り扱いを受けているが、ここではそのような差別を排し、同一の視点で考えたいからである。「おわりに」で彼女は、金英達『在日朝鮮人の歴史』（著作集Ⅲ, 明石書店）を手がかりに、在日韓国朝鮮人をめぐる用語の考察をおこなっているが、上記の用語はこの考察をもとにしている。

ところで私は上記の研究（済州島四・三事件）に触発されて、日本の敗戦＝植民地支配からの朝鮮解放直後からの韓国史を詳しく調べる機会を得た。そして朝鮮戦争のさなかに米軍による民間人約300人の虐殺がおこなわれた老斥里（ノグンリ）事件や独裁者李承晩大統領による20万人余りの大虐殺（補導連盟事件）などを知ることになった<註1>。

そして、このような事実を調べていくうちに、恥ずかしいことに、韓国が李承晩→朴正熙→全斗煥などの独裁大統領をいただき、独裁国家だと言われてきた北朝鮮をはるかに凌ぐ独裁国家だったことを知ったのであった。韓国が本格的に民主化されたのは金大中が大統領に選ばれた1998年以降であり、独裁時代のほうがはるかに長かった（50年以上）のである。

私たちは独裁国家＝北朝鮮という宣伝だけを鵜呑みにして、隣国韓国の本当の歴史を知る機会を一度も与えられてこなかった。したがって「済州島事件」で、事件前に28万人もいた島民が、抵抗運動が完全に鎮圧された1957年には3万人弱にまで激減したことを知ったときの衝撃は今でも忘れることができない。まして1980年に起きた光州事件については知る由もなかった。

この光州事件は、私が大学を卒業して石川県で高校教師をしていた1980年5月18日に始まり、民主化を求める学生や市民の運動が最終的に鎮圧される5月28日までに、韓国軍による死者・負傷者の数が5000人以上にのぼったこと、それを米軍が支援または黙認したこと、この事件を理由に金大中氏が死刑判決を受けていたことなど全く知る機会がなかった。当時の日本におけるメディアが、いかに情

報統制されていたかを知って愕然とせざるを得ない。

その後、私はブルース・カミングス（2003, 2004）、チャルマーズ・ジョンソン（2000, 2004）およびチョムスキーのインタビュー（2006）を通じて、更に新しい韓国・北朝鮮像を得ることになる。が、これについては別に報告する機会があることを望んでいる。なお以下で「私」とあるのはインタビューをした学生（小池美也子）である。彼女は現在、シンガポールの日本人学校で教師として勤務している。またインタビューで登場する「キム・ホス」は仮名である。また最後のNOTESは寺島による。またREFERENCESも寺島が追加したものが含まれている。

2 キム・ホスさんの思想と行動

2-1 出会い

2004年4月17日（土曜日）、私は高麗大学でキム・ホスさんに会った。彼は当時、高麗大学韓国語学科で韓国語を勉強している語学留学生だった。私がキム・ホスさんに出会ったのは、4月3日にソウル中央高校で行われた、韓日高校生の交流会である。キム・ホスさんはこの交流会を見学し、そして通訳のために来ていた。私と同じ小グループで生徒たちの交流を見学したので、少し彼の話を聞くことができ、私は彼に非常に興味を持った。というのは、彼が在日で本名を名乗りながら、日本で公立中学校の教師をしていると聞いたからだ。そこで私は彼と連絡を取り、直接会って話を聞くことにした。

2-2 キム・ホスさんの自分史（誕生～大学） 第1回インタビュー 2004年4月17日

キム・ホスさんは、兵庫県神戸市の生まれで、現在は西宮市で教鞭をとっている。今回は詳しく聞くことができなかったのだが、兵庫県には教師が1～3年間自分の勉学のために休職できる制度があるらしく、彼はそれを利用して韓国に留学に来ているようだ。今回は彼の小学校から大学までの話を聞いた。

彼が生まれたのは1960年。彼は民族学校ではなく公立学校に通名で通った。幼いころからハンボックを着た祖母の姿や、法事の様子、親の言葉が日本語から別の言葉に変わることなどから、友達の家と自分の家は違うということを知っていたようだ。そんな彼が「自分は日本人ではない」と強く感じだしたのは、小学校の中・高学年の頃だ。

小学校では歴史の授業が印象的だったという。というのは、教師が朝鮮は弱い国だ、という立場に立って授業を行っていたからだそうだ。教師にはクラスに在日の生徒がいるからという配慮はなく、日本人と同様に在日の生徒を扱っていた。キム・ホスさんは、教師に人権的な配慮がなかったと振り返っている。

キム・ホスさんは、このような小学校での生活を通し、日本人と同様な眼を身につけていった。それは、朝鮮は弱い国だ、日本は優れているという感覚であった。この頃は歴史や今の世界についての知識がほとんどなかったため、ただ「自分はなぜ朝鮮人として生まれたのだろうか」という劣等感を持ち、朝鮮人ということを知られぬよう隠そうとしていた。

キム・ホスさんが小学校を振り返る言葉の中で印象的だったのは、「この頃は在日のアイデンティティを形成するための材料はまったく与えられていなかった」という言葉だ。学校の教師は上へ書いたように、在日の生徒に対する配慮はなかったし、家庭でも2世である親自身が在日の歴史・問題などをよく知っていたわけではなかったので家庭での民族教育も行われなかったようだ。

私が興味深く聞いたのは学校の教科書についてだ。教科書にはよく、「我が国の産業は…」や「私たちの国には…」などという言葉が出てくる。キム・ホスさんは教師に当てられ、教科書のこのような文章を読むように指示されたとき、すぐくとまどった。教科書にこのような言葉が出るたびに、「自分はこの表現に含まれる人間なのだろうか」と悩んだという。

キム・ホスさんは高校に入学した頃から自分のアイデンティティについて深く考え出す。彼が通っ

た高校には朝鮮文化研究会があり、彼はときどきそこに顔を出していた。そこには意識の高い先生がいて、その先生と話すために顔を出していた。朝文研に行けば、その先生から数学を教えてもらったので、それを言い訳のようにして通っていた。しかし、友達には自分が在日だということは話していなかった。こっそり朝文研に通っていた。隠そうとする強い意志はなかったが、話せるだけの勇気もなかった。朝文研のある建物には同和問題研究会もあり、同和問題についてもこの頃知ることが多かったという。

そして高校を卒業する頃になると、自分で自分を偽っていることから抜け出そうと本名を名乗る決心をする。そしてついに卒業式で彼は本名である「キム・ホス」を名乗った。しかし、だからといって在日としてのアイデンティティが確立されていたわけではなかった。名乗りながらもとても不安だったという。

大学は工学部建築学科に進学する。資格があれば在日でも日本で生きていけると親に言われ続けてきたため、自分もそう考えるようになっていた。彼は手に職をつけようとこの学科を選んだ。この頃は教師になれるとは思っていなかったという。

この頃は本名を支えるだけのアイデンティティはまったくなかった。心が本名を支えられず、本名を名乗ることがとても辛かったという。具体的に言うと、初めて会う人に自分の名前を紹介するとき、一人一人に名前の説明をしなければいけなかった。とてもしんどかった。そして彼はだんだんと話すことを避けるようになり、失語症のようになっていったという。

そんな時、大学でも韓国文化研究会・朝鮮文化研究会に出会うのだ。そこで「渡航史」を学ぶ。渡航史とは、どうして在日が日本にいるのか、という在日の歴史だ。彼は人生の中で初めてこのことについて学んだ。これまでは、日本人のふりをすることだけが、在日が日本で生き残る道だと考えていた。しかし、韓国文化研究会・朝鮮文化研究会で在日について学ぶ中で、在日として生きていく道を少しずつ見つけていくことができ、心は軽くなっていったという。

2-3 自分史(大学卒業～教師生活) 第2回インタビュー 2004年5月21日

今回の聞き取り調査では、大学卒業から韓国留学まで話していただいた。

前回のレポートにも書いたように、キムさんは差別社会の中で生き残っていくために手に職をつけようと建築学科に進学する。そして就職も建築関係の仕事を探していた。そして大阪にある在日の人が経営する建築会社に就職する。その時、その社長(通名)から通名で就職しないかと持ちかけられたという。取引などを考えると、本名よりも通名を使用したほうが良いのではないかと、ということだった。この提案は断り、彼は本名で働くことを決める。

実際に働き出してみると、自分の時間はなく、会社に通うだけの毎日だった。しかし社会を見てみると、世の中は問題だらけ。毎日会社に通うだけの自分の存在はこの社会において意味があるのだろうか、ということに悩みだす。しかし、大学にかけた時間やお金のことを考えると辞めるだけの勇気も出なかった。そんな忙しい毎日の中でも、社会とのかかわりを求めて大阪にある民族団体に顔を出していたという。そこで様々な人々に出会い、彼は1年で会社を辞めることを決心する。大学生の時、両親を亡くしていて、自分だけのことを考えたらいいのではないかと、という思いも理由のひとつだと言う。

その後職場を転々とする。「どうせ一度の人生、差別があろうが自分が一番やりたいことをやろう」という気持ちだったという。そして表街道を歩いている人とは関わらず、周りと比較しないようにしていったという。

自給自足の生活に憧れ、まず無農薬・有機野菜の八百屋で働き出す。そこでは、今まで出会ったことのないような人と出会うことができた。そして、彼らから社会から外れていたとしても、こだわりを大切に生きる道があることを知ったという。さらに、彼は「今ある社会の問題とどう向き合うのか」という答えが今の生活では見つけられないと考え八百屋を辞める。そして放浪の生活を送る。アメリ

かに1ヶ月行ったのも良い経験になったという。

郵便局でバイトをはじめ、特別に参加させてもらった組合の勉強会で岩井好子さんという女性に出会う。彼女は中学校教師を定年退職した後、その退職金で自主夜間中学を作った人だった。公立夜間中学とは、学齢期に中学校の教育を受けられなかった人が何歳からでも中学校教育を受けられるようにする中学校だ。主に普通公立中学校の教室を夜間に利用して授業が行われる。

この中学校には、部落差別を受けてきたため公教育を受けられなかった人、在日のハルモニ、ニューカマーの外国人、不登校の中学生、身体障害者の人、などが通っている。公立の夜間中学は3年で卒業しないといけない。しかし、60、70歳のお年寄りには3年で字をマスターすることは難しいため、岩井先生は自主的に、学びたい人がいつでもどこだけでも学べる自主夜間中学を作ったという。その中学校をキムさんは見学に行く。

そこにいたのは、在日1世のハルモニがほとんどだった。キムさんも字が分からないハルモニに直接、字を教えた。彼にとって教えるということは初めての経験だった。キムさんは、その時のハルモニの喜んだ顔が忘れられないという。この時、自分が人の役に立ったことを初めて実感した。自分がハルモニに字を教えているはずなのに、反対にハルモニの一生懸命な姿に教えられることがあったという。

60、70歳のハルモニが今から字を覚えようとする。真剣に学ぶということをハルモニの姿から学び感動したという。そしてこのような場所と関わりながら生きて行きたいと思った。その想いはいくつかの夜間中学を見学する中で強くなっていったという。

キムさんは教師になることを考え出す。この時代、在日が教師になるという話は聞いたことがなかったという。でも「講師ならできるのではないか」という話を聞いたことがあったため、その道に進むことを決める。まず彼が行わないといけなかったこと、それは教員免許取得。大学の編入試験に落ちたため、母校に通い、聴講で取得することにする。

本来なら2年で取得できるはずだったが、この間に教員免許法が変わったため、3年間かけて取得した。90年夏の教員採用試験を受け、91年4月から採用された。実は、公式的に在日コリアンが公立学校に採用されたのはこの年が初めてだった<注2>。この年、兵庫県で採用された在日コリアン教師は3人だったという。

彼が夢見た夜間中学校の教師は、後で知ったことには、新任のような若い教師には回ってこないという。定年間近の教師たちが順番待ちをしているくらい人気がある仕事であった。それは、昼の中学校より仕事がハードではなく、さらに手当てが付き、退職金も良くなるという。夜間中学校の教師にはなれなかったが、昼の中学校の教師にもとても魅力を感じているという。そしていつかは夜間中学でハルモニと韓国で学んだ韓国語で話すことが夢だという。

2-4 あこがれの韓国留学へ

いよいよ夢の教師生活が始まったのだが、教師生活を続ける中で、焦りが出てくる。それはあまりの忙しさのために自分がしたい勉強ができなくなったことだ。今のうちに勉強しようと思いつき、韓国に語学留学することを決意するのだ。その際、兵庫県で始まっていた教師研修制度を利用することにした。

彼が韓国に来ようと思った理由。彼は以前から韓国に行きたい、という想いを持っていた。それは教師になったことでストップせざるをえなかった韓国語の勉強をするため。そして、人間として未熟な自分を変えよう、という想いもあった。

十数年前、伝統楽器を学びに韓国に来たとき、韓国人の言葉の勢いに感動したという。何を話しているのかは分からなかったけど、その話す雰囲気からその人の人生を感じることができたという。韓国語を話せるようになりたいというよりは、彼らの言葉を聞けるようになりたいと思った。そして、自分もそんな言葉の力を身につけ、自分をさらけ出して話せるようになりたかった。そんな韓国人に

対する憧れもあったという。

さらに心の表面には最近は出てきてなかったが、心の奥底には「日本は自分の国ではない。だからこんな差別などの重荷を生まれた瞬間からもっているんだ。自分の祖国である韓国に行けば、差別もなく、日本で自分が味わっている苦しいことも解決されるのではないか」という期待があったという。

具体的には、韓国語の勉強を目的としてきたのだが、ここに来て知りたかったことは他にもあった。それは「ナショナリズム」についてだ。キムさんによれば、これは韓国にも日本にも違う形で存在しているという。日本の場合、日本人は考えてないようにみえるが実際は「ナショナリズム」を持っていて、しかしそれについて確かに学んできたわけではないので、日本が今後どうして行ったらいいのか、という展望も持っていないという。そしてその矛盾を狙って、今の有事法案などがでてきているという。

では、韓国はどのように「ナショナリズム」が存在しているのか、ということ調べようと思った。それは、個人のテーマでもあったが、教師としても知っておかないといけないと考えているという。

「単一民族国家」という考え方を、日本人も韓国人も持っている人が多いが、これこそ敵と見方の理論だという。そして、国家を動かす人間は国をまとめるためにこれを利用しようとする。この理論からは差別が生まれる。朝鮮には檀君神話<註3>という神話がある。朝鮮にも日本と同様に、朝鮮は神から生まれた国だという神話があるのだ。キムさんは、韓国人はこの神話を信じてはいないものの、肯定的に見ている人が多いという。

このような世界では、在日コリアンという存在は生まれた瞬間から自分のアイデンティティについて悩まなければならない。一方、日本人、韓国人は悩むことは少ない。それは、日本人、韓国人がマジョリティだからだ。自分のアイデンティティ問題に苦しんできたキムさんは、あるとき気づくのだ。「自分の苦しみは、日本人の目から見ているから存在するのではないか」と。この苦しみは自分が社会のマジョリティになった時に初めて解決される。それまでは、自己否定をし続け、劣等感を持ち続けるしかない。

マジョリティがいるからマイノリティが存在する。自分はマイノリティの中にいながら、マジョリティの価値観を身につけてしまった。だから辛いのだ。上に書いた、生まれた瞬間から持つ重荷とは、自分が日本の中で生きてくる中で、自分で身につけてしまったものと気づいた。差別は自分の意思とは関係なく実際に存在する。でもそれは自分の意識とは関係ないのだ。この世に不必要な人間などいない。生まれたての人間に差はなく、社会の価値観によって差をつけられてしまうのだ。

このような発想に至ったのは、大阪の民族団体で、在日コリアンで脳性まひの女性に会って、彼女と接する中で気づかされたという。この気づきの後は、自分をかわいそうとは思わなくなったという。ただこの社会は生きにくい、不便だと思うという。

話を戻して、彼が韓国に来て感じたことを聞いた。

「自分は韓国人ではない!!」と感じたという。そして韓国で生まれた韓国人と同じになりたいわけではないということを見つけた。韓国には個人を縛り付けるものが多いという。それは伝統、習慣、しきたり…という長い歴史の中で培われてきたものだ。彼はこれらのものに反発を感じたという。彼にとっては韓国も住みやすい国ではなかったのだ。彼が胸に抱いてきた期待は、住みやすい国という形では実現しなかった。

韓国人は「在日コリアン」について多くを知らない、と彼は言う。在美(在米)韓国人と同じように考えている人が多いという。では、在日コリアンは韓国人ではないのか、という話を韓国人とすると、「韓国人の血が入っているから韓国人だ」という結論になるという。韓国人にはウリ意識(共通点を持って仲間とすること)が強い。だから、彼らは自分との共通点を作るために、在日コリアンを血統という点で無理やり仲間に行っているのではないかとキムさんは述べる。

他には、日本人が韓国に来たときに感じることは、在日コリアンも同じように感じていることという。つまり、日本人がびっくりするような風習には、在日コリアンだってびっくりすることもあるのだそうだ。

2-5 キムさんの夢、これからのテーマ

最後に、これからのテーマについて聞いた。

彼は、「国籍や民族を乗り越えた教育をしたい」と言った。それぞれが違ったルーツを持っているが、それは外にまもっているだけ。中身は同じ人間なのだ。違う服を着たもの同士が、お互いの服を尊重しながら暮らしていける社会をどうしたら作っていいのかを、生徒たちとともに考えていきたい。そんな大きなことが伝えられなくても、ヒントでもいいから発信し続けていきたいと語った。

2-6 考察

キムさんと話していると私はまるで学校の先生から授業を受けているような感じがした。彼が歩んできた人生、感じてきたことは、社会経験の少ない私には少し実感しにくかった。もっと彼の考えを実感できるよう、私は多くの社会を体験し、知る必要があると感じた。私は特に彼が公立中学校の教師という事実注目している。彼ならずばらしい国際理解教育ができるのではないだろうか。私の夢は教師だが、彼のような公平な知識や教育に対する情熱を持った教師になりたいと思った。

彼のインタビューの中で、私が日本に帰ったら調べようと思ったのは、まず就職における国籍条項について。特に公立学校における教師の国籍条項についてまとめたい。私は教育学部に在日韓国人の友達がいいたのだが、彼女は教員採用試験を受けず、一般企業に就職した。しかしもし彼女が教師を目指していたら…。この問題は私もとても身近に感じる事ができたので、ぜひ調べてみたいと思う。岐阜県における採用状況も調べてみたい。

2つ目は夜間中学について。教師になる前に、一度は大阪を訪れ、夜間中学を参観したいと思う。ハルモニの一生懸命な姿を私も実際この目で見てみたい。

3つ目は少し抽象的なのだが、「マジョリティがいるからマイノリティが存在する」という言葉の意味をもっと深く考えてみたい。キムさんはインタビューの中で、「自分は日本人の眼を身につけてしまった。だから苦しかったのだ」と話していた。マジョリティの中にあるマイノリティは、マジョリティの価値観で自分を見つめるから苦しむのだ。マイノリティのアイデンティティ形成についても関心を持って過ごしていきたいと思う。

そして最後に。これを卒業論文の自分の中での結論にしたいのだが、様々な背景を持った子ども達がお互いについて学び、さらにお互いを認め合えるような教育とはどんなものかということを考えている。つまり「国際理解教育」とは何か、ということについてもっと自分の意見が持てるようになりたいと考えている。

3 鄭亜美（チョン・アミ）さんへのインタビュー

3-1 出会い

私が亜美さんと出会ったのは2月。私にいろいろアドバイスをくれていた友達が、亜美さんを紹介してくれた。小さくてかわいい女の子。それが第一印象だった。しかし、在日コリアンの話になると、彼女の目の鋭さが変わった。私はその変化にびっくりしながらも、彼女の話にひきつけられ、彼女をすごく尊敬するようになった。

亜美さんとは韓国で何度か会い、親交を深めることができた。今までも少しずつ話を聞いてきていたのだが、今回インタビューという形で話を聞かせてもらった。彼女は、大阪国際理解教育研究センターが作ったビデオ「在日外国人問題の原点を考える」の第3巻（展望編）『出会い：在日コリアン3世と日本の若者たち』に出演している。

3-2 鄭亜美さんの自分史（誕生～朝鮮中級学校） インタビュー2004年5月24日

亜美さんは在日3世として東京で生まれた。亜美さんと亜美さんの姉は幼稚園から中学校まで民族学校に通った。亜美さんの父が日本学校に通い、そこで差別を受けた経験を持ち、また韓国語を独学

で勉強したためとても苦労してきた。そこで、子どもには朝鮮語での教育を望んだこと、そしてアイデンティティの確立がよりスムーズに進むよう、子どもを民族学校に進ませることにしたそうだ。

民族学校に通っていたころは、2つの世界で生きていたと言う。学校では朝鮮語で北朝鮮について肯定的に学ぶ一方で、一歩外に出れば、まったく正反対の世界があるのだ。その日本社会とは、北朝鮮を完全に否定する社会だ。幼いころは、学校教育を疑うことはなかったもので、なぜこれほど違う世界を行き来しているのか分からずひどく悩んだと言う。しかし、朝鮮民主主義人民共和国 (以下「北朝鮮」と記述する) の親戚 (韓国, 北朝鮮どちらにも親族がいる) から来る手紙 (「薬を送ってください」など) を見て、学校が教えていることがすべて正しいわけではないことは知っていたそうだ。

小学校のころは電車通学だった。学校帰りに同じ民族学校の友達の家で遊んでいた。亜美さんはバレエを習っていたので、その教室を通して日本人の友達がいた。民族学校に通っている友達に比べたら、日本人の友達は多かった。日本人の友達に名前について聞かれると、幼いながら在日コリアンについて説明していたと言う。日本人の子どもの中には、深い考えもなく「国に帰れ」と言う子がいて、傷つくこともあったという。

小学校のころは制服がブレザーだったので安全だったが、中学校では制服がハンボック (チマチョゴリ) だった。中学校は家から5分の距離だったが、その短い距離の中でも、何度も怖い思いをしたことがあると言う。その頃、テポドンなどで北朝鮮について多くの報道がされている頃だった。おじいさんに肩をつかまれたり、罵声を浴びせられたりしたという。そのためブザーを持って通学していた。

東京ではこのような事件が多かった。父兄からは制服をブレザーなどにしてほしい、という意見も多かったそうだが、学校の運営側は民族としての誇りを保つため、と意地になっていたようだ、と亜美さんは言う。亜美さん自身は、命より大切なものはない、とハンボックを廃止してほしいと思った。

次に家庭での教育について聞いた。家の中では、挨拶と「アッパー (お父さん), オンマ (お母さん), オンニ (お姉ちゃん)」という呼び名だけは必ず朝鮮語で話すと決まっていた。

3-3 自分史 (高等学校～大学)

高校は、簡単な試験を受ければそのまま民族高校に進学できたが、それが嫌で日本学校を受験することを決める。朝鮮万歳という民族学校での教育が窮屈になっていたと言う。亜美さんは「もっと広い世界が見たかった」「客観的な教育を受けたかった」と話した。他の理由には、朝鮮高校には、勉強ができる生徒とできない生徒が混在しており、自分のレベルにピッタリ当てはまらなかったため、日本学校に行こうと思った。

しかし、振り返ってみると、中学校まで民族教育を受けて良かったと亜美さんは感じている。在日としてのアイデンティティを形成するための材料は、日本学校に通うよりは多いのだ。

彼女が進学した高校は国際高校といい、帰国子女や、外国籍生徒が多かった。生徒の国籍は様々だったのだが、その中で亜美さんは韓国人として見られることがあったという。そのため、高校でも在日として主張する必要があった。在日についての演劇をしたり、友達同士で在日について語り合ったりした。そして彼女は高校生時代に論文を書く。それは外国人登録についてだ。

この論文によって、大学の論文入試に合格し、法学部に入学した。また国際理解教育のための在日コリアンのビデオに出演するなど、大学生になって自分のことについて話す機会が増えていったと言う。

大学では韓国文化研究会・朝鮮文化研究会、両方に顔を出していた。でもどちらかに在籍するということにはしなかった。

3-4 韓国留学へ

次になぜ韓国に来ようと思ったのかを聞いた。

高校の頃から、韓国で長期間過ごしてみたい、という想いはあった。それは韓国に行けば、自分の問題が解決するかもしれない、という期待があったからだ。日本での窮屈さから開放されると思った。

そして韓国に留学しようと積極的に動き出したのは、将来を考え始めた頃だ。一種の現実逃避でもあった、と振り返っている。

在日として日本で一生懸命生きる毎日の生活に疲れていて、休みたい、という想いがあった。自分のこと、在日のことを日本から離れ、韓国でじっくり考えてみようと思った。親には、比較法を学ぶため、韓国の法律を学んでくる、と言って出てきた。

2003年9月、高麗大学の語学堂で3ヶ月のコースで韓国語6級を学ぶ(最上級)。来たばかりの頃は、自分が話す朝鮮語と、韓国語の違いに戸惑ったが、1週間過ぎる頃には韓国語に慣れていたという。

韓国に来て感じたこと。それは「自分は韓国人ではない」ということ。韓国人を理解しようと思っても、韓国人に憧れることもなく、同じようになれるとも思わない。

韓国人は在日について何も知らない。そのため初めの3ヶ月はいらいらしていた。自分が名前を言っているのに、日本人として見られる。そのたびに傷ついた。日本で在日として一生懸命生きてきたのに、韓国では日本人として見られる。韓国人も在日1世2世の苦勞を知らない。苦勞を知ったら、在日も日本人も同じだなんて言えないはずだ。韓国にも在日を切り離した責任があるのだ。

韓国人を見ていると、自分の話し方は日本人と同じだと思う。韓国人のような強い話し方はできない。けれど、在日コリアンについてだけは誰に対してもはっきり話せる自分でいようと思う。

亜美さんは、韓国語のクラスで先生と衝突することがあった。それは、韓国人の先生が在日と日本人をひとまとめにするからだ。一度、先生から「お祭りで日本人代表として着物を着てほしい」と頼まれたことがある。もちろん断った。

一番大きな衝突は、韓国語の授業で、卒業発表を準備している時に起こった。亜美さんは2003年テグユニバーシアードで起きた美女軍団問題についてまとめて発表することになった。最後には「思想の違いを理解しあい、違いを認め合った上で統一」というようにまとめようとした。だから、「プukkan(北韓：韓国での北朝鮮の名称)」という名称を使いたくなかった。北朝鮮側も韓国のことを「ナンソン(南朝鮮)」と呼んでおり、お互いが自分中心に考えている。このままでは統一なんてないと思ったからだ。「北朝鮮民主主義人民共和国」という名称も、「民主主義」に納得できない。日本人が「北朝鮮」と呼ぶのは嫌だが、今回は「北朝鮮」を使いたいと思った。しかし、現行の最終チェックの段階で、韓国語教師から直すように言われた。亜美さんが「プukkan」は使いたくない、といくら訴えても、教師も「プukkanだってナンソンと呼ぶじゃない」と言う形で平行線だった。結局先生の立場も考え、プukkanで発表することになった。しかし、発表の最後に「プukkan」という名称の矛盾、危うさについて説明した。ロシアの留学生などには、ただの単語の問題としか写らなかった。しかし、他の在日の生徒は分かってくれた。亜美さんは「この問題はロシアだって、中国だって、日本だってみんな関係しているのだから、関係ないなんて思わず一緒に考えてほしい」と述べた。

3-5 考察

2人目のインタビューは、鄭亜美(チョン・アミ)さんだった。亜美さんは私にとってとても大切な友達だ。彼女は私と同じ歳なのだが、私よりもはるかに多くのことを経験し、自分の考えを持っている女性だった。

彼女と話していると、私は本当に多くのことに気付かされる。例えば、私が日本の公立学校のことを思わず「普通学校」と言ってしまった事がある。彼女は間違いを指摘したりするようなタイプではなかったのだが、彼女が意識的に「日本公立学校」「民族学校」と言っていることが伝わってきて、私も言葉に対してすごく神経を使うようになった。言葉というのはただの単語なのだが、言葉がその人の意思を表している場合もあるし、何も考えずにその言葉を使っているとしても、その言葉によって意識もひきずられてしまう場合もあるので、言葉ひとつひとつに注意する必要があると思う。

彼女は私がインタビューした他の人と比べ、割と早い時期からアイデンティティの形成が進んでいる。それはやはり民族教育の力が大きいだろう。民族教育についても調べ、民族教育とアイデン

ティティの形成の関係について考えてみたい。

インタビューの中に少し出てきたが、彼女の親戚は北朝鮮にもいて、北朝鮮から手紙が届いていたという。彼女にとって北朝鮮とは遠くて関係のない国では決してないのだ。このように感じている在日コリアンは、日本には本当はたくさんいるだろう。彼らは、今の北朝鮮バッシングの報道をどのように見ているのだろうか。

亜美さんは「朝鮮半島が南北に分かれてしまったのは、日本にだって責任がある」と話してくれた。この言葉がなんとなくはイメージできるが、具体的にはどのような意味なのだろうか。歴史的背景から考えてみたいと思った。

大阪国際理解教育センターが作った在日コリアンについての学校教材ビデオに亜美さんは出演している。そのビデオの最後に「自分が在日について語ることで、世界が平和になるのなら、自分は在日に生まれてよかった」というとても印象的なコメントを述べている。私はこのコメントを聞いた時、このコメントに希望を感じうれしくなった。

“在日”という今はマイノリティに押し込まれている存在が、自分達について、今の世の中の問題について、世界に向かって発信していくことで、マジョリティの中にも問題意識が生まれ、マイノリティを苦しめているマジョリティの意識を変えていくことができるのではないかと思っていた。また今は外に向かって発信することができない他のマイノリティの人々にとっても、世界に出て行く勇氣になるのではないだろうか。しかし、私は“外に向かって発信すること”を、実際に今苦しんでいる人に期待するのは、とても残酷なことに感じていたのだ。しかし、亜美さんは、それを“よかった”と言っているのだ。私は、その力強い言葉にうれしくなってしまった。在日には大きな力がある。私はそこに希望を感じる。

亜美さんの話には、私が知らなかった事実、今まで考えたこともなかった考え方がぼろぼろ出てくる。それが私の中に、違和感なく入ってくるのは、亜美さんが自分の不満を、自分たちのことだけを考えて述べているのではなく、日本社会がよりよくなるように考え、自分の経験や考えを述べているからだと思う。だから考えを押し付けられているという感じはなく、素直に話を聞き入れることができたのだ。彼女に出会えて本当に良かった

4 金友美(キム・ウミ)さんへのインタビュー

4-1 出会い

金友美さんは私がキョンヒ大学語学学校で韓国語を勉強していたときのクラスメイトである。

初めての授業の日、彼女は自己紹介で自分のことを「チェイルキョッポ」と紹介した。初級の私たちのクラスでは、きっと誰もこの言葉の意味が分からなかっただろう。韓国語の先生だけが、「うんうん」という顔で聞いていた。私にとって彼女が韓国で初めて親しくなった、「在日同胞(在日コリアン)」だった。

「“ウミ”と呼んでね」と言ったこの子は、ばりばりの大阪出身。関西弁でマシンガンのように話すパワフルな女の子だ。一度だけ、みんなと話しているときに、大阪の在日コリアンについて話してくれた。私は機会があれば絶対にインタビューしてみたいと思った。でも、一度クラスメイトとして親しくなってしまうと、真面目な顔で向かい合うことが少し怖くなっていた。そのまま月日はすぎ、お互いの帰国が迫ってきたところで、私は勇気を出して彼女に頼んだ。「インタビューをさせてもらえない?」。

4-2 金友美さんの自分史(誕生～中学校) インタビュー 2004年6月8日

ウミさんのインタビュー場所は、ソウルの中心にある住宅街の中に突如現れるお寺。韓国のお寺は、日本のお寺とは雰囲気まったく違う。お寺の壁を彩る色が韓国らしくとてもビビッドだ。ウミさんは韓国留学中このお寺に住んでいた。

ウミさんは、大阪府東大阪市生まれの在日3世。祖父は僧侶であり、25歳のときに高野山で修行す

るために来日し、祖母は17歳のとき出稼ぎのため来日した。そして日本で結婚し、日本で60年近く住んだ後、10数年前に韓国に戻ってきている。

友美さんの国籍は韓国籍。学校は地元の公立小学校・中学校に通った。東大阪市は在日韓国・朝鮮人が多く住んでいる地域のため、彼女のクラスの三分の一から四分の一程度は在日韓国・朝鮮人だったという。学校には本名の生徒も、通名の生徒もいた。友美さんは日本で通名で生活してきた。通名とはいえ、苗字を聞けば、在日韓国・朝鮮人かどうかはすぐ分かったという。

この地域では日本人と多くの在日韓国・朝鮮人が一緒に生活していて、それを誰もが当たり前のようによく考えていたため、「在日だから…」などと言われることもなく、また悩むこともなかったという。在日ということを出端に起こるいじめなどの問題もなかった。反対に、もし日本人の子どもが「在日なんて…」などという発言をすれば、在日の子どもは「在日だからなんだっていうの！！」と言い返せるくらいの強さがあった。日本人だから、在日だから、という意識は友美さん自身の中にはなかったというし、きっと日本人の中にもなかったのだと思う、と振り返っている。

学校では「同和教育」の授業があり、部落について、在日について日本人の生徒とともに学んだ。彼女の住んでいる町の近くに「部落」があったため、また学校に在日の生徒が多かったので、この授業は他の学校より熱心に行なわれていたという。部落差別、在日韓国・朝鮮人について在日と日本人と一緒に授業を受けたことがお互いにとって良かったという。民族学校ではこのような内容についてもっと時間をかけて学んでいると思うが、日本人と一緒に学ぶことができない。でも自分は日本人と一緒に話し合いながら、これらについて学ぶことができ、とても勉強になったという。他の地域に住む日本人に比べたら、自分の地元の友達のほうが、在日についてよく理解していたのではないかという。今でも小・中学校の友達、つまり地元の友達が一番親しい。そのグループは半分が日本人で、半分は在日だという。

放課後には、週に一回「朝鮮語学級」があった。これは行きたい子が通う、在日韓国・朝鮮人が祖国の文化について学ぶ学級である。ここでは歌や楽器、踊りについて習った。

このように、日本の他の地域に比べ、在日韓国・朝鮮人が多く住んでいたため、差別されるようなこともなく、自分のアイデンティティについて悩まざるをえないような時もなかったという。みんな、日本人、在日関係なく、勉強や部活に精を出す毎日だった。

4-3 自分史（高校～短大）

自分の周りの環境が少し変わるのが高校からだ。友美さんは東大阪市内にある私立の高校に進学した。学級には様々な地域からの学生が集まっていた。40人のクラスの中で在日韓国・朝鮮人は2、3人程度だった。そのため、今までのように周りに在日がたくさんいる、という感覚ではなく、友達の輪の中にいるとき、この中で在日って私だけかな、という感覚へと変わっていったという。

友達と話していて、自分が韓国人だというと、「韓国人なんだね」とあまり驚かず、受け入れてくれたと言う。それはその日本人の友達自身がちゃんと教育を受けてきたから、また今までに在日の友達がいたからではないかと考えている。そんな友達も、ふっと「日本人ってさ…だよ」と、まるでここには日本人しかいなくて、日本人に同意を求めるような話し方をするときがあった。その時、友美さんは「私は日本人ではないんだけどな」と、輪の中にも話には参加できず、中途半端な気持ちで聞いていたという。

これは日本人の子に悪気があるわけではなく、ずっと友美さんと一緒にいると、在日ということを意識せず、まるで日本人のように見てしまうようになっていたのではないか。仲のいい友達と話するとき、あまり頭で考えず、感じたままの言葉が出てくる。だからぱっと出た言葉は、その子がそれまでの人生で学んできた事、感じてきたことがそのまま出た言葉ではないか、と友美さんは考えている。つまり、日本人も在日も同じなんだ、という意識が日本人の中にはあるのではないかというのだ。

友美さん自身は自分が韓国人ということは分かっていたのだが、韓国人としての誇りはなかった。

それはいくら韓国人といっても、韓国に住んだことはなく、韓国語ができるわけではないし、韓国の文化もよく知らないで自覚していたからだ。日本社会の中で日本人と同様に勉強したり運動したりと生活が忙しく、自分が韓国人だ、ということについて考える時間もなかった。民族学級も時間がなくて行けない時が多かった。在日について学ぶ余裕もなかったし、在日についての考えを要求されることもなかったので、何も知らないまま来てしまったと振り返っている。

その後、短大の文芸学科に進学する。1年生のときはほとんど学校に通っておらず、仲の良い友達もいなかった。だから短大では自分が在日だと話すことはなかった。

彼女のアドバイザーの先生はアメリカ人の英語教師だった。その先生の授業で、英語で履歴書を書いているとき、友美さんがゆっくり書くのを見かねて、先生が代わりに書いてくれた。その時、先生が国籍の欄に「JAPAN」と書いていた。それを見た友美さんは、それまでは短大で自分が在日だということを行ったことがなかったのだが、履歴書の国籍は重要だと考え、先生に「国籍は韓国です」と伝えた。

それを聞いたときの先生の顔が忘れられないという。先生は「やっぱり。友美は日本人じゃないと思っていた」と自分の考えは正しかったのだとうれしそうな顔をしたという。授業の後、他の学生は帰っていったのだが、教室に2人で残りいろいろな話をした。この日以降、この英語教師ともっと親しくなり、先生もいろいろ相談に乗ってくれるようになった。

友美さんが短大に入って自分が在日だと話さなくなった理由について聞いた。

短大の友達に授業だけの友達だという。それ以上の深いつきあいはなかった。授業では「日本人のための授業」という雰囲気を感じ、自分が置いていかれているような気分だった。そこで日本人として扱われると「自分は日本人ではないんだけど・・・」と反発を感じつつも、それを言うのはめんどくさかった。言いにくさがあったという。一方、日本人も在日も同じなのだからあえて言わなくてもいい、という気持ちがあったという。

4-4 韓国留学決定

そして就職を考えなくてはならない時期が来た。まだ就職したくない、という気持ちがあったので、オーストラリアかアメリカに語学留学をしようと考えていた。それをアドバイザーの英語の先生に話したとき、口では「いいんじゃない」と言っていたのだが、急に「韓国に行ったらどうだ。韓国に身内はいるのか」と聞かれたという。友美さんが「おじいちゃんとおばあちゃんがいる」というと、「絶対行くべきだ。一ヶ月、二ヶ月の短い期間でもいいから行って来い。韓国人なのに韓国語を知らないだろ。韓国語を学んでおいで。」と強く勧められた。

この話を母親にしたとき、母はすごく驚いたという。というのは、友美さんは今まで「韓国留学」ということを一度も母に対して口にしたことがなかったからだ。母は驚きながらも、すごく喜んでくれ、「行ってきなさい」と背中を押してくれた。

友美さんは日本に永住することを当然のように考えていたため、それまでは韓国語を学ぶという考えはまったくなかった。しかし、アメリカ人の先生に韓国留学を勧められたとき、先生が少し韓国語を話したという。そして「ともみは分からないでしょ」と言われた。その時友美さんは、「韓国人なら韓国語を知るべきかもしれない。いや知るべきだ」と思い、韓国語が話せない自分がはずかしくなった。

もしこの言葉を日本人や韓国で育った韓国人に言われていたら、「できんくたって当たり前でしょ。日本で生まれて日本で育ったんだから。これからも日本に住んでいくのだから韓国語は必要ない。日本で日本人と同様に努力して今まで生きてきたんだから、日本人や韓国人にもんくをいわれるすじあいはない」と感じたと思うが、アメリカ人に言われたことで、競争心が芽生えたと言う。韓国に戻っていた祖父・祖母も韓国留学に同意してくれ、短大卒業3ヵ月後、2003年7月に韓国にやってきた。

地元の友達の中には在日がたくさんいたのだが、韓国留学経験者や、留学しようと考えている友達はいなかった。在日の友達に韓国留学について話したとき「おまえすごいよ。一人で韓国に行こうと

思うなんて」と驚かれ、尊敬されたという。

4-5 韓国留学へ

韓国留学を決めた後、すごく不安があった。韓国には祖父・祖母がいると分かっているにもかかわらず悩みや緊張があった。これは自分の祖国である韓国に行くからあるもので、もしアメリカに留学するのだったらなかったものだった。

韓国に来てから、韓国人に会うと「日本から来た韓国人です」と自己紹介をしていた。自分の韓国語力では、韓国人なのに韓国語ができない、と思われていることが分かったし、思われることが嫌だった。そんな時、友美さんは「韓国人でも在日は違うんだ」と韓国人に向かって叫びたくなったという。

今は韓国語が少しできるようになり、あまり気にせず「韓国人です」と話せるようになったそうだ。韓国人と話していると、「やっぱり韓国人の話し方をするね」と言われるという。韓国語はまだまだ流暢に話せるわけではないのだが、雰囲気は韓国人だと言われることが多かった。それは、家に韓国人の家族と住んでいるから、また小学校の頃から歌など、朝鮮半島の文化を肌で感じてきたからではないだろうか、と考えている。友美さんは、そのような言葉を聞くと、「やっぱり私には韓国人の血がながれているんだ。だから雰囲気があるんだ」と思ったという。

友美さんは、韓国では本名を名乗っている。それについて聞いた。

キョンヒ大学語学堂は、母の知り合いがいる民団系の日韓友好協会を通して行った。韓国に行ってみたら、すでに本名で登録してあったので、その後も本名を名乗り始めた。パスポートも本名なので、外国では本名のほうがいいのではないかと考えた。

本名を名乗りだした頃、違和感があった。「ウミ（友美の漢字を韓国語読みするとこうなる）」と呼ばれても、反応するまでに時間がかかったという。ぎこちない感じだった。今になって考えてみたら、同じ漢字で同じ意味なのに、音の響きや雰囲気が違う名前を2つ持っていることが面白いな、と思うらしい。最近では名前を呼ばれてから反応するまでの時間は短くなってきた。

では「ともみ」と「ウミ」で、どちらがより愛着を感じる名前かを聞いた。やはり日本で21年間「ともみ」と呼ばれてきたので、「ともみ」に情を感じるという。本当の名前は「ともみ」だと思おう、と話してくれた。

「日本に帰ったらもっと上手に韓国語が話せるようになると思う」と言った。それは日本の方が緊張せず韓国語が話せるはずだ、と考えているからだ。「韓国に来たことで韓国語の自信が持てた。日本では韓国語を自信を持って話せるはずだ」と話していた。

次に、韓国にきて感じたことを聞いた。

「在日について知らない人が多い」と言う。韓国人の中には「在日は国を捨てた存在だ。おちこぼれだ」というイメージを持っている人がいると聞いたことがあると話した。そのような態度で接する人もいたという。友美さんは、「自分はそこまで努力して生きてきたわけではないが、一世二世の努力を知ったらそんなこと言えないはずだ。精一杯生きてきた人にそんな事絶対いえないはずだ」と憤るという。韓国で生まれ育った韓国人には、在日が日本で生きるつらさは分からない、という。

日本での生きにくさについてはまわりの在日の人からよく話を聞く。でも友美さん自身はまた実感したことはないという。よく聞く話はやはり就職と結婚について。就職については、友美さんは仕方がない、と言っていた。「どんな国でも自分の国の人から採用するのではないか」と言っていた。

4-6 将来

最後に将来について聞いた。

ウミさんは6月の半ばに日本に帰国する。もう帰ってもいいのではないかと、という感覚があったという。また韓国に来たいかという問いに対しては、韓国語の勉強は日本で続け、韓国には時間ができたらまた来たい、と答えていた。自分の国だから、何度も行き来をしたい、といった。

日本に帰ったら母の仕事を手伝いつつ日本で就職する予定だという。結婚についてだが、「朝鮮半島の血が通っている」人と結婚したいという。それは在日、韓国人、日本人と定義するわけではないという。自分が選ぶ人は、「朝鮮半島の血が通っている人」のはずだ、それはなんとなく感じるはずだ、だから好きになるはずだ、と言っていた。でも実際には、日本国籍の人は好きになると、自分や相手の中身以外の問題がでてきて難しいので、できるだけ韓国籍の人がいいという。最後に「血は大事だと思う」と述べた。それを彼女は韓国留学の中で感じたのだろう。大切なことは、違う流れを持つもの同士が、お互いを尊重しつつ、同じ場所で暮らしていくことだと締めくくった。

4-7 考察

3人目のインタビューは金友美さん。3人の中で一番若く、在日が多く住む地域から来た女性。そういう意味では、彼女の考え方やスタイルが、日本にいる在日コリアンの大多数の人と共通しているのかもしれない。

今回のインタビューでも、興味深く聞かせてもらった部分がたくさんあった。

一つ目は、ウミさんが韓国留学を決めたきっかけ。彼女は在日でも日本人でもないアメリカ人に勧められ留学を決意した。このアメリカ人の先生は、ウミさんが韓国人だということを本能的に感じ、先入観を持たずに受け入れてくれた。だからウミさんは、その先生のことを信頼し、先生の言葉を受け入れられたのだろう。

ウミさんは日本人や韓国人に韓国語のことを言われたとしたら、腹がたつという。でもその一方で、韓国人なのだから、韓国語はできた方がいい、という考えもある。きっと整理がつかないもやもやした想いが、心のどこかにひっかかっていたのだろう。日本で生まれ、日本人と言われて育ってきた私は、このようなもやもやした気持ちを持ったことがない。だからこの部分をイメージすることが難しかった。“日本で生まれたけれど、韓国人なのだ”ということを受け入れること、つまり在日としてのアイデンティティを身につけることの難しさがうかがえる。

二つ目に、“韓国人”なのに韓国語ができないという想い。私も韓国に来たとき、韓国人と容姿に差がないため、韓国人と思われることが多かった。でも私のつたない韓国語を聞いて「あぁ、韓国人ではないんだ」と思われていることを私自身感じた。私もその「あぁ」という表情が苦手だった。「あぁ」が自分の国の仲間ではないんだ、という拒絶のように感じたときもあった。もしアメリカに行っていたら、見るからにアジア人のため英語ができないことも初めから理解してもらえ、ゆっくり話してもらえるのに、と思っていた。ウミさんの場合、そこに「韓国人なのに」韓国語が分からないという意識も自身が持たざるをえなかったし、韓国人に持たれているのではないか、という怯えを感じていたのではないだろうか。

「日本に帰ったらもっと上手に韓国語が話せるようになると思う」というコメントを聞いて、私は友美さんは韓国ではまだ完全に自信を持てたわけではないのだ、まだ緊張して生活しているのだと思った。友美さんにとって韓国よりも仲間が待つ日本のほうが緊張や悩みを持たずにありのままに生活できる場所だと、友美さん自身感じたから、この言葉が出たのではないかと思う。

私の印象では、ウミさんは今まさにアイデンティティについて悩んでいる時期ではないかと感じた。彼女にとって韓国留学が、アイデンティティを考える上での、大きなきっかけ、また材料になっただろう。今彼女が持っている考え方では、もしかしたら今後の人生の中で大きな壁にぶち当たった時、その問題を解決できないかもしれない。そんな危うさが彼女の中にはまだ残っている気がした。しかし、彼女なら韓国で学んだことを活かし乗り越えて行けるのではないかと思う。

5 洪順愛 (ホン・スンエ) 先生へのインタビュー

5-1 出会い

私がホン・スンエ先生と初めて出会ったのは、2002年の秋。韓国留学を考えていた私は、地域科学

部で開講されている朝鮮語の授業を聴講させてもらうことにした。聴講生の私を先生は快く授業に迎え入れてくれた。

最初の授業で先生は自己紹介をされた。先生は在日韓国人。名古屋韓国学校で韓国語を教えている。数年前に韓国の大学に留学し、卒業している。私が朝鮮語の授業を受ける中で知りえた先生の話はこのぐらいだった。

その後、私は韓国に留学し、韓国で3名の在日韓国・朝鮮人の友達にインタビューを行った。そして日本に帰国した今、もっと違った立場の在日の方のお話を聞きたいと思った。そこで私はホン先生にインタビューをお願いしたのだ。

5-2 ホン・スンエ先生の自伝史 インタビュー第1回 2004年11月10日

ホン・スンエ先生は、1945年名古屋市中川区で生まれた、韓国籍を持つ在日2世。彼女の父は植民地時代に日本に大学留学していて、母は韓国で父とお見合いをし、父とともに日本に渡ってきた。「なぜ両親は韓国に帰らなかったのですか」という私の問いに対して、先生は「両親にいつでも帰れるという気持ちがあったのではないか。また日本で一旗揚げて錦を飾りたかったのではないか」と答えられた。

小・中は地元の日本学校に通った。クラスに1、2名在日の子がいたのだが、その他にも在日だとは分からず付き合い合っていた子もいただろうという。ほとんどの子が通名なのだが、中には本名で通っている子も学校の中に1、2人いた。先生は苗字を日本風の通名にして学校に通ったが、在日韓国・朝鮮人が住んでいる地域はほぼ決まっていたので、自分が在日韓国人だということはみんな知っていたという。在日韓国人だということで、差別されたり、いじめられることはもちろんあったと言われたが、それ以上詳しくは話されなかった。

この頃、高校への進学率は40%前後。先生は商業高校に進学した。韓国・朝鮮籍のままでは入学できない高校もあったという。

そして先生はそれまでの人生の中で一番大きな壁にぶちあたった。それは“就職差別”。多くの在日の人々が自営業などの家族経営的な職場に進んでいたのだが、先生は保険などがしっかりしている職場に入りたかったので、一般の企業へ就職活動をしていた。しかし、国籍が問題になり活動は難航した。大企業はほぼ無理だったという。親に相談しようと思っても、親が解決できる問題ではないと分かっていたので、一人でひどく悩んでいたという。先生は名前を“順子”と通名にし、高校の校長先生の助けを得て何とか就職を決めた。

先生が就職した会社は将来に希望が持てる職場ではなかった。先生はその会社で働く中で初めて韓国語を学ぼうと思ったという。

先生は小・中・高と日本学校に通ったのだが、民族教育はほとんど受けてこなかった。家の周りほとんど日本人家庭で、両親は娘のことを考えて表立った民族教育はしなかったという。お姉さんは、終戦の頃に学齢期で、朝鮮小学校に1、2年通っていた。しかし、思想教育をされては困ると両親は朝鮮学校を退学させ、日本学校に通わせたという。親はホン先生には朝鮮学校に通わせようという考えはまったくなく、朝鮮学校との交流はほとんどなかった。ただ、お正月になるとなぜか朝鮮学校の生徒から年賀状が届いたという。

先生は自分の家がそれほど韓国的だとは感じていなかった。先生が朝鮮半島の文化と関わるのは家に親戚が集まるときぐらいだった。その日は親戚同士が韓国語で話し出したという。もちろん日常生活を見れば、自分の家は日本人の家とまったく同じではなかっただろうかと振り返っている。

そのような状況で育ってきたため、韓国語を勉強する、ということはそれまで考えてこなかった。避けてきたという。それが、社会に出て働く中で、韓国語を勉強してみようと思ったのだ。

ホン先生は働きながら名古屋韓国学校に通う生活を続ける。そして、韓国語の上達とともに学校で講師として教えるようになっていった。

そんな中、韓国への興味は高まり、1970年韓国に初めて旅行する。音信不通だった親戚に母が手紙を書いてくれ、韓国では母方の親戚に多数、会うことができた。

5-3 韓国留学

そして1985年、韓国留学。このとき先生は40歳。韓国留学を決めた一番の目的は韓国語を学ぶことだった。まずは、ヨンセ大学の語学堂で2ヶ月学ぶ。そして、86年に成均館（ソンギョングァン）大学へ入学した。

88年のソウルオリンピックの頃から、日本から韓国への留学生が増えていったという。それまでは韓国の社会が不安定で留学することは難しかった。日本からの留学生は日本人、在日韓国朝鮮人、両方がいた。在日韓国人は、韓国の大学へ別枠で大学入試があり、先生はそれを利用して入学している。

成均館大学は大学路(テハンロ)・明倫洞（ミョンニョンドン）にあり、先生はこの大学で国史を専攻し、古代から朝鮮時代にかけての国史を学んだ。韓国の国史は日本の学校に通っていた先生にとってはまったく学んだことのない歴史だった。

先生が韓国に留学していた頃は、韓国の大学で民主化のデモが多かった時期で、授業がほとんどできない状態だった。デモに近づくと、在日韓国人は危ないといわれ、先生はデモと関わらないように注意していたという。

韓国では、日本語を教えるアルバイトをしながら大学に通っていたという。先生が朝鮮語を話されていたのは、大学の友達よりも日本語を教えることを通して知り合った友人が多かった。留学生同士で付き合う時間は少なかった。

韓国留学を振り返ってみて、韓国に留学をしたことは良かったと思っているようだ。40歳で仕事を辞めて留学するということは、国籍、年齢という点でとても難しいことだ。だが、自分が韓国語を教える、ということ考えた場合、韓国で生活するという経験は絶対に必要だった。

韓国に行きたいけど行けなかった頃は、韓国のことを憧れとして見ていた。でも実際に韓国に行ってみて、韓国を憧れとしてではなく、普通に見ることができるようになった。先生から見れば、日本も韓国も住みやすさという点では同じで、どちらが良いという訳ではないという。韓国に行き、実際に生活したことで、ありのままの韓国を知ることができたという。

私は今までのインタビューで、在日韓国・朝鮮人が、韓国人なら自分たちのことを分かってくれるのではないかと、という期待を持って韓国に留学しても、結局韓国人も日本人同様に在日韓国・朝鮮人についての知識や関心がなくショックを受けた、という話を聞いていた。そこで、先生にもこの点について聞いてみた。先生はショックを受けるということはなかったという。初めから「自分たちのことを分かかってほしい」などという期待を持って韓国に行かなかったそうだ。先生はそのように感じた在日の若者に対し「若いからだね」と話していた。

韓国に留学中は、いずれは日本で韓国語の教師がしたいとは思っていたが、すぐにできるとは思っていなかった。だから大学卒業後も韓国に住み続け韓国語を極めようと思っていた。しかし、大学を卒業する頃、名古屋韓国学校から日本に戻って韓国語の先生にならないか、という話が舞い込んだ。先生は大学卒業とともに帰国し、名古屋韓国学校で教師として働き出した。

5-4 現在

最後に現在について聞いた。先生は名古屋韓国学校についてもいろいろ話して下さった。

名古屋韓国学校は学齢期の民族教育ではなく、余暇に民族教育を受けられるようにしよう、という考え方で創立された。それは、学齢期に日本[式]の学校に通わせないで [純粋な] 民族学校に通わせるのは非常に難しいという見解からだったという。

学費がいくらぐらいか聞いたのだが、他の語学塾に比べ非常に安かった。それは学校運営の多くの部分が寄付によってまかなわれているからだという。

学校に通う学生は年齢も国籍も様々。先生が学校に通いだした頃は、日本語も韓国語も文盲に近い人もいたという。故郷に行って親戚と話すために韓国語を学ぶという人が多かった。名古屋韓国学校は、どんどん日本人学生の比率が上がり、現在では60～65%は日本人だという。

以下、質問形式でまとめる。

Q1「最近では“韓流ブーム”などという現象もありますが、その辺りをどのように見えていますか。」

A1「日本人が韓国に興味を持つことは良いことだと思う。ただ、もっと“本質”を知るべきではないか。」

Q2「日本人に対してどのような想いをもってみえますか。」

A2「在日問題に拒否反応を示す人は、私たちとは体験してきたことが全く違うため、在日に関する知識がほとんどない。自分が日本人の友達にこれらの問題について話すと、攻撃的にとられ、自分たちが非難されていると感じるようだ。そのため話を避けることが多い。

若者の中には『在日だからって関係ないじゃん』とか『別に在日だっていいじゃん』などと言う人もいるが、これも無知から来ていると思う。そして彼らには問題意識はまったくない。では、『もし日本と朝鮮半島の間で何か起こったら?』ということを考えてしまう。それに、『在日だっていい』という発言の裏には、韓国を低く見て、日本に住むことを『認めてやる』という気持ちがあるのではないか。」

Q3「現在の在日、今後の在日についてどう考えられますか。」

A3「もちろん差別はあってはならない。自分に子どもがいたら、もっと現在の社会に存在する差別を実感できただろう。甥や姪を見ていると、自分が在日だということを隠そうとしていることから、まだまだ差別があることが分かる。でも、自分が若かった頃のほうがもっとあからさまな差別があった。

今後、在日韓国・朝鮮人はもっと日本人化していけよう。ただ、彼らが出自に対してコンプレックスを感じることがないように社会にしていかなければならない。彼らが、帰化することに決めても、屈辱的な手続きをせず、判子ひとつでできるような体制に変わっていくべきだ。屈辱的な帰化はあってはならない。」

5-5 第1回目インタビューの考察

ホン先生へのインタビューは、なぜか今までのインタビューよりずっと緊張して望んだ。そんな私に対して、先生は落ち着いて丁寧に答えてくださった。今まで話を聞いた3人とは年齢的に違いがあるため、今まで聞いたことのない話が聞けてとても有意義だった。

先生と話している中で、私は今までの3人とは根本的に違う何かを感じた。それは、先生から“怒り”を感じなかったことだ。私は先生が“怒り”を超越したところにいるのではないか、と思った。

先生は、自分がどのような差別を受けたか、ということ具体的に話されなかった。また、事実を事実として話し、そのときの感情についてあまり話されなかった。話したくなかったのかもしれない。だが私は、先生が差別に対する怒りをすでに昇華されているのではないかと思った。「今後の目標はありますか？私の在日の友達は・・・と言ったのですが。」という私に問いかけに、「若いね」と答えられた先生は、きっと自身もそのような情熱を持って生きてきたのではないだろうか。そして、様々な経験を通して、今のように落ち着いて、たおやかに過ごされているのではないか、と感じた。

そんな穏やかなインタビューの中で、先生の感情が動いた、と感じた瞬間があった。それは、私が「私の友達が『友達がもしかしたら自分は在日韓国人かもしれない、って言い出したの。でもそんなことどうだっていいじゃんね』と言っていたのですが・・・」という話をしたときだ。先生は、それまでの雰囲気とは変わって「そこに無知がある」と強い口調で話された。穏やかに見えた先生の中には強い問題意識、日本人に対する感情があるのだ、ということを感じた瞬間だった。これは当然のことだろう。私は単純に先生の優しさに目を奪われていただけなのだ。先生はそれらの感情を心にしまい、日本人と接してきたのではないか、と思った。

私が韓国で出会った在日韓国・朝鮮人はほとんど自分と年が変わらない人たちだった。今回先生と話したことで、在日韓国・朝鮮人の像がさらに少し広がった気がした。今よりもっと差別が激しい時代を生きてきた人。その人が、優しく私に笑いかけながら話してくれる。どんな体験をしてきたのだろう、どんなことを感じてきたのだろう、私はすごく興味がわいた。“興味がわく”という表現が適切かどうかは分からない。だが、私は自分が無知な状態だということに気づけたのだから、もっと貪欲に知識を増やしていきたいと強く感じた。私は先生を含め在日の多くの方が私たちにそれを望んでいる、と勝手に解釈したのだ。姜尚中氏が「パーソナルストーリーを大切にする」と話されていたが、私も一人一人違うストーリーを大切に受け止めていきたいと思った。

5-6 ホン先生への疑問 第2回インタビュー 2004年12月22日

第1回目のインタビューを通して、ホン先生がいう“日本人が知るべき本質”とは何なのか、ということをもっと深く知りたくなった。さらに、寺島教授とのゼミを通して、ホン先生の“北朝鮮の拉致問題”に対する考えを聞いてみることにした。

以下、質問形式でまとめる。

Q1「先生が体験された差別とは具体的にはどのようなものですか？」

A1「はっきりとしたものでは、高校受験のときに国籍条項がある私立の高校があり、受験ができなかったこと。また、当時は国体に参加できなかった。

学校の中では、教師にクラスの中に在日の生徒がいるという配慮がなかった。子ども心に、先生の差別的な態度を感じ取っていた。明らかな差別をする先生もいて、『朝鮮人は嫌い』と言われたこともある。

子ども同士の中では、普段は特別なことをされなくても、何かあると『朝鮮人は帰れ』などと言われた。きっと親がそうやって言っていたからではないか。子どもは相手の弱点を突こうとしていた。最初から友達になろうとしない子もいた。」

Q2「先生が前回お話を聞いた時、日本人は韓国についての本質を知るべきだと話されましたが、この『本質』とは何ですか？」

A2「在日韓国・朝鮮人に関する認識もなく、『関係ない』とか『在日も日本人も同じ』と言う人は、何かあったときに変わるのではないか。それは知識を持って、よく考えたうえで出た言葉ではないから。認識がある上で、『関係ない』というのとは違う。そのような在日韓国・朝鮮人に関する認識をもって欲しい。もちろん在日の側にだって、そういう部分がある。在日同士が集まれば、日本人の悪口を言ったりする。」

Q3「日本人の中には、在日の存在を感じられず、学ぶきっかけがない人もいないですか？」

A3「それは、在日自身が出自を隠そうとしているからだ。自然体ではないのだ。そのためもあり、まわりの日本人は在日の存在に気がつかない。他の国出身の方はすぐに日本人ではないと分かるのだが、在日は黙っていれば分からないのだ。

そして帰化がマイナス的だ。堂々としていない。でも、もしこのようなことを日本人が言ったとしたら、私はその日本人を非難する。自分としてはもっと堂々として欲しい。

このように在日韓国・朝鮮人が自分の本当の姿を隠そうとするのは、自分の国籍に劣等感をもってからのからだ。それは、そもそも日本社会の中で在日の問題が解決されていないからなのだが。また、植民地時代に日本に渡ってこなければならなかった人の多くは貧しかった。そこから、在日は汚い、貧乏だ、という劣等感が、在日自身の中にもある。またそのような評価が、今の日本人の在日に対する印象につながっている。

難しいのではっきりとは言えないが、これらの日本人の意識は、天皇制にも関わっている。人は誰だって、自分より惨めな人がいるという優越感を持ちたいものだ。日本人にとって、それが在日朝鮮人だったのだろう。

在日自身の中にも、『在日』というイメージがある。それは、『日本国民を育てる』日本の教育を日本人と共に受けることで、日本人の目を身に付けてしまったためだ。

差別を受けたことがないと言う人もいる。そういう人は、金持ちだったり高学歴だったりする。でも、もし何か起こったら、彼らもどう扱われるのか分からない。ただし、日本人に『差別を受けたことがありますか?』と聞かれること自体が差別だという人もいる。

相手が差別しても、自分が差別だと思わなければ、差別ではないのだ。だから、在日はもっと堂々とすべきだ。いわれのない引け目を感じたり自分の出自を隠したりして自分を縛らず、堂々とすることで、在日の心はもっと解放されるのではないか。」

Q4「北朝鮮による拉致問題についてどう考えられますか?」

A4「拉致は本当にひどいことだと思う。被害者の方が気の毒である。誰もそう思うでしょう。ですから、かつて日本がしたことを考えてみるべきです。もちろん、在日の問題で北朝鮮による拉致問題を正当化するつもりはない。拉致問題を議論しつつも、自分たちがしたことについても、説明すべきだし、報道されるべきだ。マスメディアは拉致問題を報道しても、日本が行った強制連行についてはほとんど報道していないではないか。

個人の怒りと、国家の怒りを区別しなくてはならない。歴史をちゃんと学んだ日本人もこのように考えているだろう。韓国に対して一応賠償はすんだ、という形になっているが、北朝鮮に対して、日本は賠償していない。その問題も考えないといけない。」

Q5「南北統一に関してはどう考えられますか?」

A5「分裂されている状況に対する意識が、当時と今とでは変わってきている。南北分断当初は肉親を求める思いが統一を望んだ。しかし現在では、一世代、二世代と、世代が下がるにつれて肉親を求める感情は薄らいできているのではないか。テレビで離散家族が再会する様子などを見たが、その後はどうするのだろうか、などと考えてしまう。会うことで悲劇が生まれないのだろうか。この先、どんな感情的なつながりが薄れ、国と国との問題になっていくと思う。

統一は韓国にとって経済面から見たら不利である。進んで来た道が大きく違うため、統一しようとした場合、多くの問題が起こる。その問題を乗り越えられるのならば、統一もあるかもしれない。

今の韓国も北朝鮮も軍事費がかかりすぎて、発展の障害になっている。もちろん、韓国に住んでいる人と私たち日韓国人の考え方は違う。韓国人は戦争の可能性があると考えているだろう。韓国では、男子は18歳から20代の時に2年も兵役義務につかなくてはならない。時間的にも経済的にももったいない。兵役義務はなくなるといいのと思う。そのためには、南北の統一がなかったとしても、国交が正常化し、自由に行き来できるような状況に一日も早くなって欲しい。

私は私的には在日朝鮮人とのかかわりはほとんどない。もちろん名古屋韓国語学校には朝鮮籍の生徒もいるし、立場は様々だ。家族の中に韓国籍と朝鮮籍が存在する場合だってある。韓国籍と朝鮮籍とを選ぶのは、規制はなく自分の意思によるのだ。」

5-7 第2回目インタビューの考察

先生は何度も、様々な立場の人がいると語った。そして、様々な立場の人の話を聞くことを勧めてくださった。できるだけ、多くの人の話を聞くことで、私の中で在日韓国・朝鮮人の幅がぐっと広がっていくのだろう。

先生に日本人が知るべき“本質”を聞いた。先生のお話を聞いて、在日の背景や、現状のことだと考えた。日本人が韓流ブームだ、と騒いでいる中で、在日の方はもっと在日韓国・朝鮮人にも目を向けて欲しいと願っているのだと痛感した。

今回のインタビューでもいくつかの疑問を持った。特に興味を持ったのが、「天皇制」とのかかわりである。この部分の理解を今後深めていきたいと思う。

前回よりも私の質問が具体的だったためか、先生もはっきり強く話してくださった。先生の中にあ

る、熱い想いを感じた。もちろんそのような感情が先生の中になくはないのである。先生は韓国へ留学し、現在も名古屋韓国学校で教鞭をとられているのだ。日々の生活の中で密接に韓国に接して先生は、本当にいろいろなことを考えてみえるのだろう。そのような先生へインタビューできたことをとても光栄に思った。

5-8 ホン先生へのさらなる疑問 第3回インタビュー 2005年1月19日

ホン先生に2回インタビューした。話を聞けば聞くほど、まだまだ聞いてみたいことが出てくる。疑問を先生に投げかけ、返答していただくことの連続の中で、先生の考え方を理解できると私は考えた。先生にはお忙しい中、もう一度お話を聞かせていただいた。

Q1「前回、“帰化がマイナス的だ”と言われましたが、どのような意味ですか。」

A1「まず帰化の手続が複雑で、審査の基準も分かりにくい。一言で言うと、敷居の高い帰化申請手続きを経なければならない。さらに、帰化をする在日自身が、堂々としていない。出自を隠す傾向がある。」

Q2「前回、“在日自身に劣等感がある”と話されていましたが、この点についてももう少しお話してください。」

A2「私は見たことがないが、映画“血と肉”を見てみてはどうか。在日韓国人の友達から、この映画の感想を聞いている。この映画が全てではないが、ある一面を垣間見ることができるだろう。この映画の全場面を在日韓国朝鮮人が体験しているわけではないが、断片的な体験はあると思う。劣悪な環境で育つと劣等感が芽生える。この映画には、日本人にとっては強烈だと感じる場面があるかもしれない。しかし、在日コリアンは、それほど強烈だとは感じないようだ。それは、映画に出てくる状況を多くの在日を経験してきたことだからだろう。この映画を見た日本人の感想を聞いてみたい。」

Q3「天皇制についてどのようにお考えですか。」

A3「天皇制というと、植民地時代においては神社参拝が強制されていた。私は専門家ではないので、在日代表として天皇制についてコメントすることはできない。私の考えとしては、天皇制があるということは、生まれながらにして階級があるということで、それは差別を容認することにつながるのではないか。このことについては、専門家に尋ねてみてください。」

5-9 第3回目インタビューの考察

スンエ先生は、毎週大学に講義をされにみえていたので、3回にもわたってお話を聞くことができた。私にとってとてもすばらしい経験になったと思う。

先生は、やはり今まで聞いた3人とは印象が違う。言葉ではうまく言えないが、先生は経験者、という感じだろうか。教育者として、私に様々なことを伝え、私の成長を応援してくれている感じがした。

先生へのインタビューで、日本人の在日コリアンに対する意識はどのようなものだろうか、という疑問を感じた。私たちの世代では、在日コリアンの存在を感じられず、彼らに特別な意識を持っている人はあまりいないだろう。しかし、それは無知であり、無関心であるというだけで、在日コリアンに対する日本人の差別意識がなくなっているというわけではない。問題は忘れ去られて行くだけでは本当の解決ではない、ということを感じたインタビューだった。

では、在日コリアンを苦しめてきた日本人側の差別意識というものはどのようなものだったのか、ということを知りたいと思った。そのためには、歴史をなぞるだけではなく、当時の人々の考え方の変遷を追っていかなければならないだろう。

6 おわりに

この研究を通して感じたのは、“言葉”の威力である。私は、韓国留学が始まった頃、在日コリアンの人に会うと、その人のことを何と呼んだらいいのか分からなかった。つまり「在日?」「在日朝鮮

人?」「在日韓国人?」「在日コリアン?」というように、である。相手のことを考えれば考えるほど言葉は出てこない。そして帰国後、私は金英達『在日朝鮮人の歴史』（著作集Ⅲ）を手にした。ここには金英達氏が考える、用語法のルールが書いてある。以下、P.21の内容を要約して載せる。

韓国や北朝鮮も含める国家や民族の総称として、「韓」を使うか、「朝鮮」を使うか、という用語・呼称の問題がある。これは、分裂国家の政治的対立に起因する名称問題だ。もともと、「韓」も「朝鮮」も、民族や国家の名称として、古代から使われている歴史的に由緒ある言葉だ。それが、1948年に「大韓民国」と「朝鮮民主主義人民共和国」が分裂したことによって、共通名称がなくなってしまった。そこから、南北全体の総称としてどのような用語を使うかという問題が、本国から離れた日本において発生したのだ。

この総称として①「朝鮮」を使う。②「韓」あるいは「韓国」を使う。③両者の折衷として「韓国・朝鮮」「朝鮮韓国」「韓朝鮮」等を使う。④英語名称がどちらもKOREANなので「コリア」「コリアン」を使う。などの用語方法がある。さて、この問題をどのように解決したらよいだろうか。

第一に、それぞれの用語法を認め合うことだ。要するに、「韓」も「朝鮮」にも政治的意味をこめないで、「韓国」と言おうが「朝鮮」と言おうがかまわないという立場を取る。

第二に、それぞれの人が主体的な立場で、トータル名称を一つ選ぶ。時と場合によって使い分けてもかまわない。

第三に、日本でまだ一般的に使われていない言葉、例えば「韓人」とか「韓朝鮮人」などの言い方をするときには、前もってその用語の説明が必要だ。

そして、第四に、相手方がいるときには本人の立場を尊重すべきだということだ。本人が「韓国人」であると言っているのに「朝鮮人」と呼ぶのは失礼であるし、北朝鮮から来ている人を「韓国人」と呼ぶべきではない。

最後に、歴史認識に筋を通す立場から、植民地時代に民族的蔑視感を伴って使われた用語である「鮮人」「半島人」「北鮮」「南鮮」などの言葉を使用してはならない。

また、このような用語方法もある。

A 歴史の記述においては、その時代の用語に合わせて、1948年までは「朝鮮」「朝鮮人」とし、1948年以降は「韓国・朝鮮」「韓国・朝鮮人」とする。

B 現在のことがらについての一般的記述では「在日韓国・朝鮮人」とし、特に日本国籍者も含めて言う場合は「在日コリアン」「在日同胞」とする。

C 日本での用語のなじみを考慮して、「日朝」「日韓」の語順を使用する。

私はこの用語方法を知ったとき、実は感動した。それは、今まで学んできた、歴史的背景を考慮した考え方だからだ。知識に基づいて考えれば、この問題はなんて分かりやすくなるのだろう。そして、この考え方には相手の考えを尊重するという態度が含まれている。私は、この用語方法を自分も実践してみることにした。

インタビューや自叙伝を読む中で感じたのだが、在日コリアンというのは、実に様々な背景を持っており、様々な立場に立っているということだ。彼らをひとくくりにして、理解することはできないし、ひとくくりにするのは失礼なことだと思う。相手のことがよく分かっていないのに、ある名称にあてはめ理解したつもりになる、ということを人はよくしがちである。でも一度型にはめてしまうと、なかなかその人の中身に近づけなくなってしまう。

私たちは、やはり知識を持つ必要があると思う。私が韓国留学前に、この用語方法を在日コリアンの歴史と共に、理解していれば、在日コリアンに会ったときに、悩まなくても良かったのだから。そして、もっとずっと相手と向き合えたと思う。在日コリアンとは同じ社会で生きてきて、今後も一緒に生きていく仲間である。当たり前隣に存在する存在なのだ。一緒に生きていくなれば、私たちは相手を理解できるだけの知識を持たなくてはならないと思う。

私は大学に入り、幸運にも自分の無知に気づくことができた。そして、韓国留学を通して、在日コリアンの友達と接する機会を得た。しかし、多くの日本人は、自分の無知に気づく機会がなく、学ぶチャンスも見つけられない。

このように考えると、やはり教育の中で、在日外国人のことを学ぶ機会をつくるべきだろう。遠い国の文化を知る前に、同じ社会に住む仲間のことを理解することが先決である。そして、文化や考え方に違いがあっても、同じ場所の中でお互いが気持ちよく幸せにくらせる方法を考える態度を育てるべきだ。それが、自分にとっても相手にとっても幸せな道なのだから。人を憎んで、自分の心をいじめるより、相手を尊敬し、自分が成長できる社会の方がずっとすばらしい。そのようなことを子どもたちに伝えられる大人になりたいと思う。

NOTES

- 1) 老斤里(ノグンリ)事件については呉連鎬(2001)に詳細な報告がある。これは独裁政権下で長く伏せられてきたが、一人の生存者が1994年に著書を出版し、それを読んだ『マル』誌の記者が地道に生存者にインタビューを積み重ねて記録したものである。これらの努力によって当事件は少しずつ世に知られるようになった。しかし、この事件が本当に世間に知られるようになったのは、AP通信社の記者Charles Henryとその仲間たちが1950年7月26日の事件を調査して、それを1999年9月29日に発表し世界を驚かしてからだ(ピューリッツアー賞を受けた)。だが、日本のメディアが自己規制したのか、当時の私には全く無知のことであった。
- 2) 教師の国籍条項：在日外国人をはじめとする外国籍の人は、国籍条項を理由に公務員などの採用試験から排除されてきた。公務員試験の募集要項で、特定の職種の受験資格を「日本国籍を有する者」などと定め、外国人の採用を制限してきたのだ。1991年、公立学校の教員採用試験の際に在日外国人に常勤講師への採用の道を開く、という文部省の通達が出されたが、この文部省の決定はすでに外国籍者を正規の教諭として採用した実績のある自治体に「後退」を迫るものとして批判された。現在では多くの自治体で教員採用試験における国籍条項は撤廃されている。(寺島隆吉ほか2004b)
- 3) 檀君神話：朝鮮史は「檀君(タングン)神話」から始まることになっている。檀君というのは『広辞苑』によると、「朝鮮の開国神話で、天命によって降臨した古朝鮮の開祖。名は王侯。檀樹の下に降臨した天帝の子桓雄(ファヌン)と熊女(ウンニョオ)との子。平壤に都し、1500年間統治したという。朝鮮民族の始祖・象徴とされ、檀君を崇拝する民間宗教もある。韓国で一時使用された檀君紀元の元年は西暦紀元前2333年。」とある(「一時」とは、大韓民国の初代大統領・李承晩政権下でのこと)。これは日本では神武天皇の役割と同じで、韓国の「国定歴史教科書」にちゃんと載せられている。(RELNET <http://www.relnet.co.jp/>より)

REFERENCES

- 内海愛子他, 2000『「三国人発言」と在日外国人』明石書店
- 姜尚中・内田雅敏, 2003『LOVE&PEACE 2004「在日からの手紙」』太田出版
- 金石範・金時鐘, 2001『なぜ書きつけてきたか、なぜ沈黙してきたか：済州島四・三事件の記憶と文学』平凡社
- 金英達, 2003『在日朝鮮人の歴史』(金英達著作集Ⅲ)明石書店
- 呉連鎬(オ・ヨンホ), 大畑龍次・大畑正姫共訳, 2001【朝鮮の虐殺—20世紀の野蛮から訣別するための現場報告書】太田出版
- 辛淑玉, 2003『鬼哭啾啾：「楽園」に帰還した私の家族』解放出版社
- 寺島隆吉・河田素子, 2003「国際理解教育と日系ブラジル人児童の教育(上)」『岐阜大学教育学部研究報告：教育実践研究』第5巻：113-140
- 寺島隆吉・河田素子, 2003「国際理解教育と日系ブラジル人児童の教育(下)」『岐阜大学教育学部研究報告：人文科学』第52巻1号：63-96

- 寺島隆吉・佐藤聡美・大津由衣子，2004「マイノリティの視点から見た国際理解教育：特に在日韓国朝鮮人の教育・生活・人権について（上）」『岐阜大学教育学部研究報告：実践研究』第6巻:127-173
- 寺島隆吉・佐藤聡美・大津由衣子，2004「マイノリティの視点から見た国際理解教育：特に在日韓国朝鮮人の教育・生活・人権について（下）」『岐阜大学教育学部研究報告＝実践研究』第53巻1号:91-147
- 平凡社，1994『日本史大事典』
- 法政大学韓国文化研究会・朝鮮文化研究会，2002『日朝関係を考える学生シンポジウム』パンフレット
- ソニア・リャン，中西恭子訳，2005『コリアン・ディアスポラ：在日朝鮮人とアイデンティティ』明石書店
- ブルース・カミングズ，横田安司・小林知子共訳，2003『現代朝鮮の歴史』明石書店
- ブルース・カミングズ，杉田米行・豊田英子共訳，2004『北朝鮮とアメリカ 確執の半世紀』明石書店
- チャルマーズ・ジョンソン，鈴木主税訳，2000『アメリカ帝国への報復』集英社
- チャルマーズ・ジョンソン，村上和久訳，2004，『アメリカ帝国の悲劇』文藝春秋
- Bruce Cumings, 1998, *Korea's Place in the Sun: A Modern History*, W.W.Norton&Company
- Bruce Cumings, 2004, *North Korea: Another Country*, New Pr.
- Chalmers Johnson, 2000, *Blowback: The Costs and Consequences of American Empire*, Owl Books
- Chalmers Johnson, 2004, *The Sorrows Of Empire: Militarism, Secrecy, And The End Of The Republic*, Owl Books

インターネット資料

- ・「韓国の思想と文化」
<http://66.102.9.104/search?q=cache:4pg0huru6G0J:homepage3.nifty.com/juroujinn/sinnwa.htm+%E6%AA%80%E5%90%9B%E7%A5%9E%E8%A9%B1&hl=ja>
- ・「韓国とベトナム戦争」<http://www.angel.ne.jp/~nisikori/nam/vwar.html>
- ・「済州島4・3事件と韓国現代史」大阪産業大学教員 藤永 壮
<http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ai369/kouen.html>
- ・「済州島4，3事件と在日朝鮮人」大阪市立大学朝鮮文化研究会
<http://www.advance-k.net/~forum/ro4.pdf>
- ・「老斤里（ノグンリ）の虐殺」<http://www10.plala.or.jp/shosuzki/korea/peace/nogunri.html>
- ・「老斤里（ノグンリ）事件ふたたび」<http://blog.livedoor.jp/awtbrigade/archives/50030533.html>
- ・「ラスタファリニズム」<http://www3.ocn.ne.jp/~zip2000/rastafarinism.htm>
- ・「ヴィシー政権」，フリー百科事典『ウィキペディア』
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%82%B7%E3%83%BC%E6%94%BF%E6%A8%A9>
- ・「在日韓国朝鮮子どもワールド」<http://www.geocities.jp/nyoquito/korea/korea.html>
- ・「在日本大韓国民団」中央本部ホームページ
http://www.mindan.org/search_view.php?mode=news&id=3797
在日コリアン歴史資料館調査委員・樋口雄一＝在日朝鮮人運動史研究会代表
- ・“RELENT” <http://www.relnet.co.jp/>
- ・“Korea and International Affairs”，Chomsky Interview With Sun Woo Lee. January 24, 2006,
<http://www.chomsky.info/interviews/20060124.htm>